アジアを見る眼

83

門戸開放政策下のエジプト経済

鈴木　弘明　編

アジア経済研究所

佐藤　克彦（アジア経済研究所海外調査員・オランダ人口研究所客員研究員）
鈴木　弘明（アジア経済研究所地域研究部研究主幹）
関根　英一（アジア経済研究所地域研究部研究主幹）
中村　玲子（中東経済研究所カイロ事務所長）
江藤　勝（国土庁地方振興局東北開発室長）

門戸開放政策下のエジプト経済　アジアを見る眼　83

1991年3月30日発行©

編　者　鈴木弘明

発行所　アジア経済研究所
東京都新宿区市谷本村町42
電話（代表）　3353－4231

印刷所　コロニー印刷
東京都中野区江原町2－6－7

落丁、乱丁はお取替え致します。　ISBN4-258-05083-0　C1233

ISBN4-258-05083-0 C1233

目　次

はしがき

I　人口変動と労働力――佐藤克彦…1
　はじめに…2
　1　人口変動…3
　2　労働力…11
　3　人口政策…23

II　農業における構造変化
――農地改革から砂漠開墾へ――鈴木弘明…29
　はじめに…30
　1　農地改革…36

2　アスワン・ハイ・ダムの成立
——砂漠開墾との関連——…45
3　産油国への出稼ぎ労働移動…53
むすび…59

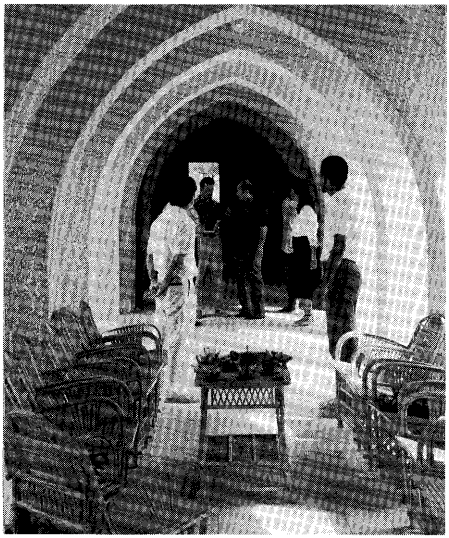
III　工業化と外国貿易——関根英一…63
はじめに…64
1　経済政策と産業構造の変化…65
2　工業部門の構造変化…73
3　外国貿易部門の構造変化…88
4　工業・貿易両部門の発展と経済成長…98

IV　財政・金融と経済構造改革——中村玲子…105
はじめに…106
1　厳しい財政事情…107
2　為替と金融の構造変化…121
3　IMF・世銀主導の経済構造改革…129

V　富・所得の分配の公平化――――――江藤　勝……139
はじめに……140
1　一九五二年革命以前の分配実態……141
2　一九五二年革命後の分配実態……153
むすび……172

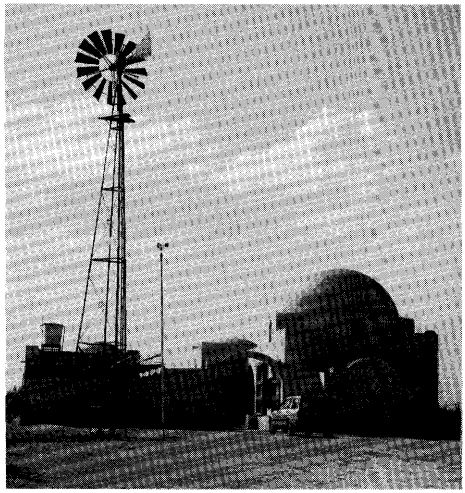
多数の庶民が利用するガムラの魚市場

小学校の下校風景。多数の小学生のため二部授業。
（ムハンデシーンにおいて）



アメリカ大学砂漠開発研究所（タハリール県）

タハリール県における砂漠開発。ナスル運河からの分水。



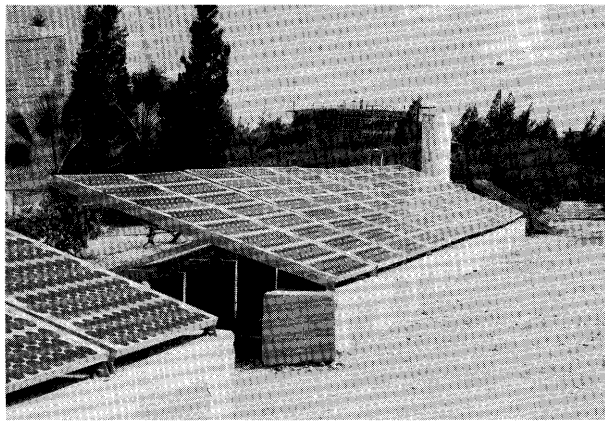
アメリカ大学砂漠開発研究所の施設
（タハリール県）

メヌウフィア県の綿花摘花風景
（わずかの労働力での摘花）

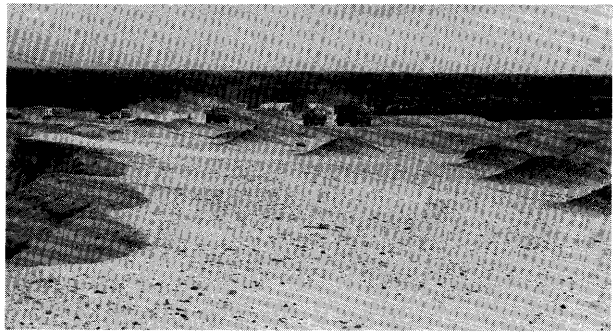
ミットオーバーの果物市場

アメリカ大学砂漠開発研究所の実験農場

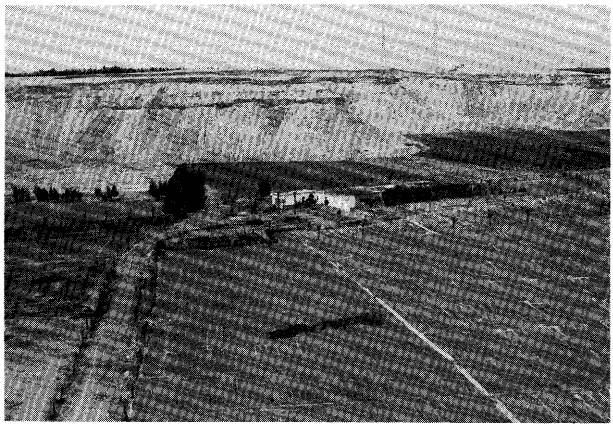
アメリカ大学砂漠開発研究所中庭。建物が耐暑、耐寒に最適



アメリカ大学砂漠開発研究所。太陽電池による発電。

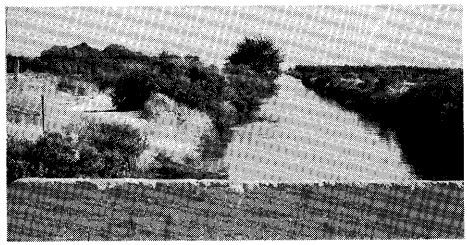


タハリール県からメヌゥフィア県を望む。
付近で砂漠開発が進捗



タハリール県の砂漠開発

レタス（アラビア語でハス）を売る農民



砂漠開発の現場。砂漠の広大な面積を緑化

ナイル川に浮かぶ外国人やお金持ちのボート群

「アジアを見る眼」シリーズ発刊にあたって

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにある。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以ってするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があって、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといいえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。――この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月　　アジア経済研究所　東畑　精

アジアを見る眼

アジアのエネルギー
林　雄二郎著

アジア諸国の経済開発とエネルギー開発の関連を〝人間のためのエネルギー〟という視点で書かれた初めてのアジア・エネルギー論。

モンスーンアジア
その自然と人間　別技　篤彦著

世界人口の過半数が集中居住し、今なお動乱するモンスーンアジア。そこに生きる人々の発展の歴史をふり返り、今後の発展の可能性を探る。

東南アジアの水
家永　泰光著

東南アジア諸国の農業技術の発展上、重要なカギを握っている「水」の問題を初めて専門的に扱いアジアの総合的な理解に資する。

東南アジアのこころ
民族の生活と意見　岩田　慶治著

著者自ら東北タイ南部のクメール族村落ブルアン村に入り農民とともに生活し、村人の生活の現状と生活観、未来観の意識についての調査研究。

ラッフルズ
その栄光と苦悩　M・コリス著　根岸富二郎訳

シンガポール建設者として、同時に東洋学者、動植物収集家としてアジアに不朽の名を残したスタンフォード・ラッフルズの栄光と苦悩の生涯。

経済統合理論の系譜
片野　彦二編

国際経済学を共に専攻する執筆陣が、共同研究の過程で検討・整理した経済統合理論発展の系譜。巻末に一三〇点の参考文献を付す。

東南アジアの華僑
游　仲　勲著

世界にひろがる一六〇〇万華僑の政治・経済に及ぼす影響は大きい。華僑とは何か――その驚異的な発展の論理を解明する。

印・パ分離への道
あるイスラム思想家の悲劇　A・ディ著　佐藤　宏訳

今なお分離独立の傷あとに悩み、血で血を洗う宗派対立から脱出しきれぬ両国の誕生のかげに埋もれた民族統一への必死の試みに新たな光を当てる。

経済成長モデルと経済発展
方法論的反省の試み
飯田　経夫著

「経済成長理論」と「経済発展理論」の不幸な分裂の原因を探り、解消の手掛りをもとめた大胆な試論。

中東の窓——レバノン
小山　茂樹著

「中東の窓」として国際的役割を担うレバノンの状況を、経済活動の面にスポットをあて、著者が現地で集めた最新のデータを使ってあらい出す。

中東雑記
林　武著

著者の現地生活を基盤に、日本人には把握しがたいと思われている中東の政治、風俗・生活、宗教を具体的に、読み物ふうに語って飽きさせない。

中国現代史の周辺
小林　文男著

日本統治下の台湾の抗日運動、毛沢東の階級概念、蔣介石と三民主義など、現代中国を理解するうえで重要な問題を掘りおこした論集。

アフガニスタンとイラン
人とこころ
津田元一郎著

古来、東洋と西洋とを結ぶ要路にあり、現在、国際紛争の焦点に立つ両国の国民性、価値観、行動のパターン等を著者の現地体験をふまえ解明。

ASEANと日本経済
片野　彦二著

ASEAN地域の経済開発が、世界経済、そして特に日本の経済にとって、いかなる意味と影響をもつものなのかを考える。

アジア人口学入門
上田　耕三・小林　和正・大友　篤著

人口学の基礎的方法とそれに関連する知識を紹介し、併せて一九七〇年前後のアジア諸国の人口の規模、構造、動態、家族計画等を概観。

アジアの教育
豊田　俊雄著

アフガニスタン、イラン、以東のユネスコ加盟17カ国をとりあげ、「アジアの社会経済発展と教育」の角度から、根の深い「教育」の現状と問題を探る。

現代エジプト論

中岡　三益著

アラブ社会主義の旗手として注目を集めたエジプトが挫折をへて、転換した過程の考察を軸に、国際社会の中で模索する中東諸国の姿を分析する。

インダス河の開発

パキスタンの水と農業

小林　英治著

パキスタンの人々にとって生命の河ともいうべきインダス河の一大水利事業の歩みをふりかえり、合わせて農業、エネルギー開発の現状を分析する。

公開講座

経済開発：理論と実際

柳原透・岩崎輝行・鈴木長年・長谷山崇彦・米田公丸著

経済開発論の現状を途上国経済の実態にてらして検討、経済開発の展望と理論への課題を示す。途上国の経済開発に関心をもたれる読者必読の書。

アジア諸国のエネルギー問題

富舘孝夫・原嘉夫・早川光彦・矢野裕子著

日本にとって重要な東南アジアのエネルギー事情の特徴と問題点を整理し、現状と将来の展望を多角的に、かつ平明に解説する。

東南アジアの石油産業

現状と将来

神原達・斉藤隆・畑山茂著

東南アジアの主要産油・消費地域にかんして、自然条件・経済的問題の両側面から、最新の情報・データをとり入れて石油需給予測をまとめる。

パプアニューギニアの社会と経済

谷内　達著

村落調査の成果やオーストラリアの専門家との交流などの経験を基礎に、図版や統計資料を豊富に用いながら現状を解剖する。

第三世界の人口移動と都市化

柴田　徳衛・加納　弘勝編

人口爆発が第三世界の都市に巨大なスラムやスクウォッターを形成している。この深刻な都市問題を多様性の中に位置づけて、解決の方向を探る。

公開講座

発展途上国の財閥

伊藤　正二編

民族系私企業の発展が比較的すすんだ国である韓国、フィリピン、タイ、インド、ブラジルを対象に、その実態に迫る。

開発経済学
文献と解題
渡辺　利夫・堀　侑編

開発途上国における開発課題のあり方と変遷について概論的な展開を試み、後段の文献解題では、できるだけ新しい文献を取り上げた。

公開講座 第三世界の食糧問題
長谷山崇彦・小島　麗逸編

21世紀に向けてますます深刻さを加えている途上国の食糧問題の実態を分析し、水産資源の開発問題、農業技術問題も併せて解説、将来を展望する。

地域経済の国際化
転機に立つ中小企業投資
山崎　充・小池　洋一編

中小企業がかかえる海外投資の問題を扱い、地域産業の特徴、国際化の現状と見通し、さらに地域特性のある業種から選んだ海外投資事例で構成。

中東の開発と統合
宮治　一雄編

70年代の経済開発政策の現在への影響を政治統合と社会統合の視点から具体的な事例により検討し、その将来を展望する。

アビジャン日誌
西アフリカとの対話
原口　武彦著

西アフリカの近代的都市アビジャン滞在中に見聞した庶民の生活ぶりを、ユーモアあふれるタッチでつづるアフリカ報告。

メキシコの教育発展
近代化への挑戦と苦悩
米村　明夫著

メキシコの教育発展の社会学・経済学的分析を通じて、途上国の社会経済発展における教育の役割への多面的接近を試みる。

「はかり」と「くらし」
第三世界の度量衡
小島　麗逸・大岩川　嫩編

途上国のくらしに根ざした度量衡の実態を、30数名の地域研究者が体験的に論じ、解明。第三世界の地域理解に必須の手引。

発展途上国の企業経営
担い手と戦略の変遷
米川　伸一・小池　賢治編

欧米の経営ノウハウ枠組が土着の経営風土に移転・転型されてどう消長したか。マルコス期のクローニー、香港のJM商会等、各国事例を具体的に検討。

「こよみ」と「くらし」

第三世界の労働リズム

小島　麗逸・大岩川　嫩編

途上三十数カ国の多様な生活リズムを、地域研究者の眼で「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。

第三世界の教育

豊田　俊雄著

途上国教育を、文化的・宗教的伝統を背景に、六地域に分けて考察。第三世界の教育に、原点をみる。

ラテンアメリカ経済の危機

新しいパラダイムへの模索

ECLAC編　小坂・細野・加賀美　訳

対外累積債務等の経済危機に瀕する中南米で、国連の地域事務局が総力をあげてその長期戦略を案出。

第三世界の農業政策

保護と財政

小倉武一監修　小島　麗逸編

財政赤字、ひいては累積債務問題と農業・食糧政策とが切り離しえない深い関わりをもっていることの一端を、各国の実態報告で明らかにする。

アセアンの経済計画

歴史的課題と展望

井草　邦雄編

国づくりのシナリオともいうべき経済計画を歴史的にたどり、近代的経済構造へ転換しつつある現在と将来の発展を考察する。

「すまい」と「くらし」

第三世界の住居問題

堀井　健三　大岩川　嫩編

「国際居住年」から二年を経て、第三世界の住居問題はますます深刻。都市のスラムに、農村の集落に、その多様な実態を浮き彫りにする三十数編。

中東

国境を越える経済

宮治　一雄編

中東主要国・地域の最近の動向の中からレバノン内戦、イスラム金融、出稼ぎ問題等、八つの代表的問題を選び、中東安定化の基本的な方向を探る。

「のりもの」と「くらし」

第三世界の交通機関

吉田　昌夫　大岩川　嫩編

ベチャから飛行機まで——途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する三五編。

アジアを見る眼

シンガポールの華人系企業集団

平島成望
浜渦哲雄編
朽木昭文

シンガポールの有力華人系企業集団20グループの生成発展過程や創業者一族のプロフィール等、その全体像を豊富な資料で解明する。

一次産品入門

岩崎育夫著

石油、金、錫、銅、天然ゴム、熱帯木材、ジュート、紅茶、コーヒー、砂糖の10品目につき各専門家により客観的データと基礎知識を紹介する入門書。